茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウム「北関東の豪族たちⅡ―「長者」たちの萌芽と基盤―」を開催して

田中　裕

令和四年度で第一七回を迎えた茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウムは、「北関東の豪族たちⅡ―「長者」たちの萌芽と基盤―」と題し、茨城大学人文社会科学部の主催、茨城大学五浦美術文化研究所の共催、茨城大学考古学研究会の後援により、令和五年二月一一日に、茨城大学講堂において開催された。以下、催事概要、講演・報告・討論内容に分けて、当シンポジウムの成果を報告したい。

【催事概要】

新型コロナウイルス感染症対策により、令和二年度は開催中止、令和三年度はオンライン開催となったことから、令和四年度は三年ぶりの対面開催となった。参加者数は一三八名を集め、未だ感染症の影響が色濃い状況下での対面実施再開という手探りの催事としては、盛況であったと評価したい。シンポジウムにあわせて、後援団体である茨城大学考古学研究会では、学生が主体となって、茨城県ひたちなか市三反田古墳群の測量調査成果をポスター発表するとともに、古墳から採集された埴輪についても実物展示を実施して、シンポジウムを盛り上げた。

シンポジウムのテーマ「北関東の豪族たちⅡ―「長者」たちの萌芽と基盤―」は以下の趣旨により設定した。すなわち、『常陸国風土記』には「常陸国」が七世紀の孝徳朝以降に置かれ、その成立以前には六つの国造国があったと記されており、地域でも最上層に当たると想定される国造に焦点が当たることが多かった。これに対し、近年、茨城県ひたちなか市では農業生産に適さない海浜部の断崖上やその斜面に、海の磯石を用いた埋葬施設をもつ特徴的な群集墳が古墳時代後期から終末期（六世紀～七世紀）になって築かれていたことが明らかになり、海の交通を担った水界民（海民・海人集団など）等の職能集団の存在が指摘されている。このような特定職能を想定できる集団の墳墓は、のちの郡司を担う「国造氏」に関わるような地域最大の古墳とは限らず、特定の役割をもつなどして地域の権力や経済を支えることにより一定の権益を握る集団の墳墓とみられる。七世紀中葉以降には、建評（郡）に伴い五十戸（里）編成も行われ、のちの里（郷）長が置かれるが、律令期の文献に見える郡領層（国造氏など）に比べ、史料が少ない里長層の実態はほとんど分かっていない。そこで、今回のシンポジウムでは古墳時代後期から奈良時代にかけての茨城県域にとくに焦点を当て、文献史料からこぼれ落ちている地域の隠れた実力者たちについて、伝承に語られる「長者」に思いをはせながら、その萌芽や基盤などを考古学的に議論することにした。

なお、本シンポジウムは二〇二二年度文部科学省科学研究費補助金基盤（c）「日本古代における「里長」層の形成過程とその政治的社会的基盤（研究代表者／田中裕）」による研究の一部を活用し実施した。

【講演・報告・討論内容】

基調講演者の西川修一氏には、シンポジウムテーマに即し、近年注目を集めている「海の古墳について」の議論の意義を、大局から講演

していただいた。茨城県ひたちなか市「ひたちなか海浜古墳群」と極めて近似する墳墓が神奈川県三浦半島に存在することから、「海民」による独自の繋がりが存在することを示すとともに、これら「海民」の存在を軽視することで偏った歴史を描きかねない、「穀類」を中心とした歴史観の危険性について、文化人類学的成果も引用しながら解説された。

基調報告者の稲田健一氏には開催趣旨に即し「ひたちなか海浜古墳群と装飾古墳からみた交流」で報告をいただき、「ひたちなか海浜古墳群」の成果及び同市の装飾古墳である虎塚古墳の調査成果を紹介しつつ、海民を通じた繋がりを通して九州との共通性にも言及された。続いて、海老澤稔氏は「七世紀後半の常陸国河内評嶋名里の様相―つくば市熊の山遺跡群と高山古墳群の調査成果から―」と題し、茨城県つくば市島名遺跡群の調査成果に触れつつ、嶋名郷の中心遺跡を舞台に、郷（里・五十戸）を構成した首長と集団を具体的に描いていただいた。これらの基調報告に併せて、茨城大学人文社会科学部生の菅原こすず氏より「古墳時代後期における関東と九州の共通性―地域的特徴をもつ土器に注目して―」と題し、九州と関東との漆仕上げ土師器を通じた類似性が指摘され、同大学院人文社会科学研究科生の山崎颯太氏・稲葉祐真氏より「ひたちなか市三反田古墳群の測量調査―筑波山系埴輪の新資料―」と題し、会場での展示内容の口頭説明がなされた。

以上の講演・報告に基づき、筆者がコーディネータを務めた討論では、西川氏、稲田氏、海老澤氏との間で質疑応答を行った。とくに、古墳時代首長の基盤、地域最上位首長層と二番手集団の関係について、それぞれの政治的・社会的基盤を考慮しつつ、

①海を通じた繋がり（いつ、どこまでの範囲でつながるのか、つながりは維持できるのか）

②磯部、海部などの氏族との関係

③古代氏族にみえる職掌集団と古墳時代の「首長」の関係

④国造制（六世紀に順次敷かれていったとの説が有力）との関係

⑤虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群・ひたちなか海浜古墳群の関係

⑥島名遺跡群と筑波国造国との関係（とくに郷家集落と高山古墳群造営主の関係とその役割）

⑦古墳時代に形成された組織（ネットワーク）について奈良時代以降に受け継がれた部分と受け継がれなかった部分はなにか

⑧伝承に語られる「長者」につながるかもしれない二番手集団の基盤はなにか

などの論点に沿って議論を行い、時間が少ない中でも考古学の枠にとどまらない地域史をめぐる有意義な討論が交わされたと評価する。

最後に、五浦美術文化研究所片口直樹所長より閉会の辞をいただき、今回のシンポジウム開催の意義を総括していただくとともに、五浦美術文化研究所の活動方針について案内があり、今後の研究所の積極的な研究・教育への関わりが周知された点でも、大いに意義あるシンポジウムになったと考える。

〔たなか　ゆたか／所員・本学人文社会科学部教授〕